

ある心の風景

梶井基次郎

青空文庫

一

喬は彼の部屋の窓から寝静まつた通りに凝視^{みい}つていた。起きて
 いる窓はなく、深夜の静けさは暈^{かさ}となつて街燈のぐるりに集まつ
 ていた。固い音が時どきするのは突き当つていく黄金虫^{ぶんぶん}の音でも
 あるらしかつた。

そこは入り込んだ町で、昼間でも人通りは少なく、魚の腹綿^{はらわた}
 や鼠の死骸は幾日も位置を動かなかつた。両側の家々はなにか荒
 廃していた。自然力の風化して行くあとが見えた。紅殻^{べにがら}が古び
 てい、荒壁の塀^へは崩れ、人びとはそのなかで古手拭のように無氣

力な生活をしているように思われた。喬の部屋はそんな通りの、
卓子テーブルで言うなら主人役の位置に窓を開いていた。

時どき柱時計の振子の音が戸の隙間から洩れてきこえて来た。
遠くの樹に風が黒く渡る。と、やがて眼近い夾竹桃きょううちくとうは深い夜
のなかで揺れはじめるのであつた。喬はただ凝視みいつている。——
暗やみのなかに仄白ほのく浮かんだ家の額ひたいは、そうした彼の視野のなかで、
消えてゆき現われて来、喬は心の裡に定かならぬ想念のまた過ぎ
てゆくのを感じた。蟋蟀こおろぎが鳴いていた。そのあたりから——と
思われた——微かすかな植物の朽ちてゆく匂いが漂つて來た。

「君の部屋は仏蘭西フランスの蝸牛エスカルゴの匂いがするね」

喬のところへやつて來たある友人はそんなことを言つた。また

ある一人は

「君はどこに住んでも直ぐその部屋を陰鬱にしてしまうんだな」と言つた。

いつも紅茶の滓かすが溜つてゐるピクニツク用の湯沸器。帙ちつと離ればなれに転ころがつてゐる本の類。紙切れ。そしてそんなものを押しわけて敷かれている蒲団。喬はそんななかで青鶯あおさぎのように昼は寝ていた。眼が覚めては遠くに学校の鐘を聞いた。そして夜、人びとが寝静まつた頃この窓へ来てそとを眺めるのだつた。

深い霧のなかを影法師のように過ぎてゆく想念がだんだん分明になつて来る。

彼の視野のなかで消散したり、凝ぎょう聚しゅうしたりしていった風景は、

ある瞬間それが実に親しい風景だったかのように、またある瞬間は全く未知の風景のように見えはじめる。そしてある瞬間が過ぎた。——喬にはもう、どこまでが彼の想念であり、どこからが深夜の町であるのか、わからなかつた。暗のなかの夾竹桃はそのまま彼の憂鬱であつた。物陰の電燈に写し出されている土塀、暗と一つになつてゐるその陰影。觀念もまたそこで立体的な形をとつていた。

喬は彼の心の風景をそこに指呼することができる、と思つた。
たかし

どうして喬がそんなに夜更けて窓に起きているか、それは彼がそんな時刻まで寝られないからでもあつた。寝るには余り暗い考えが彼を苦しめるからでもあつた。彼は悪い病気を女から得て来ていた。

ずっと以前彼はこんな夢を見たことがあつた。

——足が地脹れ(じぱ)をしている。その上に、噛(か)んだ歯がたのようなものが二列(ふたなら)びついている。脹れはだんだんひどくなつて行つた。それにつれてその痕(あと)はだんだん深く、まわりが大きくなつて來た。あるものはエワルの尻のようである。盛りあがつた氣味悪い肉が内部から覗(のぞ)いていた。またある痕は、細長く深く切れ込み、古い本が紙魚(しみ)に食い貫(ぬ)かれたあとのようにになつてゐる。

変な感じで、足を見ているうちにも青く腫れてゆく。痛くもなんともなかつた。腫物^{はれもの}は紅い、サボテンの花のようである。

母がいる。

「あああ。こんなになつた」

彼は母に当てつけの口調だつた。

「知らないじやないか」

「だつて、あなたが爪でかたをつけたのじやありませんか」

母が爪で圧したのだ、と彼は信じてゐる。しかしそう言つたとき喬^{たかし}に、ひよつとしてあれじやないだろうか、という考えが閃いだ。

でも真逆^{まさか}、母は知つてはいないだろう、と氣強く思い返して、

夢のなかの喬は

「ね！　お母さん！」と母を責めた。

母は弱らされていた。が、しばらくしてとうとう
「そいじや、癒^{なお}してあげよう」と言つた。

二列の腫物^{はれもの}はいつの間にか胸から腹へかけて移つていた。どうするのかと彼が見ていると、母は胸の皮を引張つて来て（それはいつの間にか、萎んだ乳房^{しほ}のようにたるんでいた）一方の腫物を一方の腫物のなかへ、ちょうど鉗^{ボタン}_はを嵌めるようにして嵌め込んでいった。夢のなかの喬はそれを不足そうな顔で、黙つて見ている。

一対^つずつ一対^つずつ一列の腫物は他の一列へそういうふうにして

みな嵌まつてしまつた。

「これは××博士の法だよ」と母が言つた。釦の多いフロツクコートを着たようである。しかし、少し動いてもすぐ脱れそうで不安であつた。――

何よりも母に、自分の方のことは包み隠して、気強く突きかかつて行つた。そのことが、夢のなかのことながら、彼には応えた。女を買うということが、こんなにも暗く彼の生活へ、夢に出るまで、浸み込んで来たのかと喬は思つた。現実の生活にあつても、彼が女の児の相手になつてゐる。そしてその児が意地の悪いことをしたりする。そんなときふと邪慳な娼婦は心に浮かび、喬は堪らない自己嫌厭に堕ちるのだつた。生活に打ち込まれた一本の

楔くさびがどんなところにまで歪ひずみを及ぼして行つてゐるか、彼はそれに行き当たるたびに、内面的に汚れてゐる自分を識つてゆくのだつた。そしてまた一本の楔、悪い病氣の疑いが彼に打ち込まれた。以前見た夢の一部が本当になつたのである。

彼は往来で医者の看板に気をつける自分を見出すようになつた。新聞の広告をなげなく読む自分を見出すようになった。それはこれまでの彼が一度も意識してした事のないことであつた。美しいものを見る、そして愉快になる。ふと心のなかに喜ばないものがあるのを感じて、それを追つてゆき、彼の突きあたるものは、やはり病氣のことであつた。そんなとき喬は暗いものに到るところ待ち伏せされているような自分を感じないではいられなかつた。

時どき彼は、病める部分を取出して眺めた。それはなにか一匹の悲しんでいる生き物の表情で、彼に訴えるのだつた。

三

喬はたびたびその不幸な夜のことを思い出した。――

彼は酔つ払つた嫖客^{ひょうきやく}や、嫖客を呼びとめる女の声の聞こえて来る、往来に面した部屋に一人坐つていた。勢いづいた三味線や太鼓の音が近所から、彼の一人の心に響いて来た。

「この空氣！」と喬は思い、耳を欹てるのであつた。ゾロゾロと履物^{はきもの}の音。間を縫つて利休が鳴つてゐる。――物音はみな、あ

るもののために鳴つて いる ように思えた。アイスクリーム屋の声も、歌をうたう声も、なにからなにまで。

こおんな 小婢の利休の音も、すぐ表ての四条通ではこんなふうには響かなかつた。

喬は四条通を歩いていた何分か前の自分、——そこでは自由に物を考えていた自分、——と同じ自分をこの部屋のなかで感じていた。

「どうどうやつて來た」と思つた。

小婢が上つて來て、部屋には便利炭の蠅ろうが匂つた。喬は満足に物が言えず、小婢の降りて行つたあとで、そんなすぐに手の裏返したようになれるかい、と思うのだつた。

女はなかなか来なかつた。喬は屈託した氣持で、思いついたまま、勝手を知つたこの家の火の見へ上つて行こうと思つた。

朽ちかけた梯子(はしご)をあがろうとして、眼の前的小部屋の障子が開いていた。なかには蒲団が敷いてあり、人の眼がこちらを睨んでいた。知らぬふりであがつて行きながら喬は、こんな場所での気強さ、と思つた。

火の見へあがると、この界隈(かいわい)を覆つてゐるのは暗い甍(いらか)であつた。そんな間から所どころ、電燈をつけた座敷が簾越しに見えていた。レストランの高い建物が、思わぬところから頭を出していた。四条通はあすこかと思つた。八坂神社の赤い門。電燈の反射をうけて仄かに姿を見せている森。そんなものが甍越しに見えた。

夜の靄が遠くはぼかしていた。円山、それから東山。^{ひがしやま}天の川がそのあたりから流れていた。

^{たかし}喬は自分が解放されるのを感じた。そして、

「いつもここへは登ることに極めよう」と思った。

五位すがが鳴いて通つた。煤黒い猫すすが屋根を歩いていた。喬は足もとに闊れた秋草の鉢を見た。

女は博多から来たのだと言つた。その京都言葉に変な訛りがあつた。身みだしな嗜みが奇麗で、喬は女にそう言つた。そんなことから、女の口はほぐれて、自分がまだ出てそうそうタだのに、先月はお花を何千本売つて、この廓くるわで四番目なのだと言つた。またそれは一番から順に検番に張り出され、何番かまではお金が出る由言つた。

女の小ざつぱりしているのはそんな彼女におかあはんというのが
気をつけてやるのであつた。

「そんなわけやでうちも一生懸命にやつてるの。こないだからも
な、風邪ひいとるんやけど、しんどうてな、おかあはんは休めと
いうけど、うちは休まんのや」

「薬は飲んでるのか」

「うちでくれたけど、一服五錢でな、……あんなものなんぼ飲ん
でもきかせん」

喬はそんな話を聞きながら、頭ではS——という男の話にきいた
ある女の事を憶い浮かべていた。
おも

それは醜い女で、その女を呼んでくれと名を言うときは、いく

ら酔つっていても羞はずかしい思いがすると、S一は言つていた。そして着ている寝間着きたなの汚いこと、それは話にならないよと言つた。

S一は最初、ふとした偶然からその女に当り、その時、よもやと思つていたような異様な経験をしたのであつた。その後S一はひどく酔つたときなどは、気持にはどんな我慢をさせてもといふ氣になつてついその女を呼ぶ、心が荒くなつてその女でないと満足できないようなものが、酒を飲むと起くるのだと言つた。

喬たかしはその話を聞いたとき、女自身に病的な嗜好しこうがあるのなれば

とにかくだがと思い、畢竟ひつきよう廓での生存競争が、醜いその女に

そのような特殊なことをさせるのだと、考えは暗いそこへ落ちた。

その女はおしのように口をきかぬとS一は言つた。もつとも話を

する気にはならないよと、また言つた。いつたい、やはり の、何人位の客をその女は持つてゐるのだろうと、その時喬は思つた。
喬はその醜い女とこの女とを思い比べながら、耳は女のお喋りしゃべりに任せていた。

「あんたは温柔おとなしいな」と女は言つた。

女の肌は熱かつた。新しいところへ触れて行くたびに「これは熱い」と思われた。――

「またこれから行かんならん」と言つて女は帰る仕度をはじめた。
「あんたも帰るのやろ」

「うむ」

喬は寝ながら、女がこちらを向いて、着物を着ておるのを見て

いた。見ながら彼は「さ、どうだ。これだ」と自分で確めていた。
 それはこんな気持であつた。——平常自分が女、女、と想つてい
 る、そしてこのような場所へ来て女を買うが、女が部屋へ入つて
 来る、それまではまだいい、女が着物を脱ぐ、それまでもまだい
 い、それからそれ以上は、何が平常から想つていた女だろう。

「さ、これが女の腕だ」と自分自身で確認する。しかしそれはまさ
 しく女の腕であつて、それだけだ。そして女が帰り仕度をはじめ
 た今頃、それはまた女の姿をあらわして来るのだ。

「電車はまだあるか知らん」

「さあ、どうやろ」

^{たかし}喬は心中でもう電車がなくなつていってくれればいいと思つた。

階下のおかみは

「帰るのがお厭いやどしたら、朝まで寝とおいやしても、うちはかましまへん」と言うかも知れない。それより「誰ぞをお呼びやおへんのどしたら、帰つとくれやす」と言われる方が、と喬は思うのだつた。

「あんた一緒に帰らへんのか」

女は身じまいはしたが、まだ愚図ついていた。「まあ」と思い、彼は汗づいた浴衣だけは脱ぎにかかつた。

女は帰つて、すぐ彼は「ビール」と小婢こおんなに言いつけた。

ジユ、ジユクと雀の啼声なきごゑが樋とゆにしていた。喬は朝靄あさもやのなか

に明けて行く水みずしい外面を、半分覚めた頭に描いていた。頭を擧げると朝の空氣のなかに光の薄れた電燈が、睡つている女の顔を照していた。

花売りの声が戸口に聞こえたときも彼は眼を覚ました。新鮮な声、と思った。さかき 榆の葉やいろいろの花にこぼれている朝陽の色が、見えるように思われた。

やがて、家々の戸が勢いよく開いて、学校へ行く子供の声が路に聞こえはじめた。女はまだ深く睡つていた。

「帰つて、風呂へ行つて」と女は欠伸あくびまじりに言い、束髪の上へ載せる丸く編んだ毛を掌に載せ、「帰らしてもらいまつさ」と言つて出て行つた。たかし喬はそのまままた寝入つた。

四

喬は丸太町の橋の袂たもとから加茂磧かわらへ下りて行つた。磧に面した家々が、そこに午後の日蔭を作つていた。

護岸工事に使う小石が積んであつた。それは秋日の下で一種の強い匂いをたてていた。荒神橋の方に遠心乾燥器が草原に転つていた。そのあたりで測量の巻尺が光つていた。

川水は荒神橋の下手で簾すだれのようになつて落ちている。夏草の茂なかすつた中洲かなたの彼方かなたで、浅瀬は輝きながらサラサラ鳴つていた。鶴せきれが飛んでいた。

背を刺すような日表^{ひなた}は、蔭となるとさすが秋の冷たさが蹠つていた。喬はそこに腰を下した。

「人が通る、車が通る」と思つた。また「街では自分は苦しい」と思つた。

川向うの道を徒步や車が通つていた。川添の公設市場。タールの樽^{たる}が積んである小屋。空地では家を建てるのか人びとが働いていた。

川上からは時どき風が吹いて來た。力サコソと彼の坐つている前を、皺^{しわ}になつた新聞紙が押されて行つた。小石に阻まれ^{はば}、一しきり風に堪えていたが、ガツクリ一つ転ると、また運ばれて行つた。

二人の子供に一匹の犬が川の方へ歩いて行く。犬は戻つて、ちよつとその新聞紙を嗅いで見、また子供のあとへついて行つた。川のこちら岸には高い欅の樹が葉を茂らせている。喬は風に戦いでいるその高い梢に心は惹かれた。ややしばらく凝視つてゐるうちに、彼の心の裡のなにかがその梢に棲り、高い気流のなかで小さい葉と共に揺れ青い枝と共に撓んでいるのが感じられた。

「ああこの気持」と喬は思った。「観ること、それはもうなにかなのだ。自分の魂の一部分あるいは全部がそれに乗り移ることなのだ」

喬はそんなことを思つた。毎夜のように彼の坐る窓辺、その誘惑——病鬱や生活の苦渋が鎮められ、ある距離へだたをおいて眺められ

るものとなる心の不思議が、ここが高い檻の梢にも感じられるの
だった。

「街では自分は苦しい」

北には加茂の森が赤い鳥居を点じていた。その上に遠い山々は
累々^{かさな}て見える。比叡山——それを背景にして、紡績工場の煙突が
煙を立登らせていた。赤煉瓦^{れんが}の建物。ポスト。荒神橋には自転車
が通り、パラソルや馬力^{ぱりき}が動いていた。日蔭は磧に伸び、物売り
のラツパが鳴っていた。

喬は夜更けまで街をほつつき歩くことがあった。

人通りの絶えた四条通は稀に酔っ払いが通るくらいのもので、夜霧はアスファルトの上までおりて来ている。両側の店はゴミ箱を舗道に出して戸を鎖してしまっている。所どころに嘔吐へどがはいてあつたり、ゴミ箱が倒されていたりした。喬は自分も酒に酔つたときの経験は頭に上り、今は静かに歩くのだつた。

新京極に折れると、たてた戸の間から金鹽かなだらいを持って風呂へ出かけてゆく女の下駄が鳴り、ローラースケートを持ち出す小店員、うどんの出前を運ぶ男、往来の真中で棒押しをしている若者などが、異様な盛り場の夜更けを見せていく。昼間は雑鬧ざつとうのなかに埋っていたこの人びとはこの時刻になつて存在を現わして來

るのだと思えた。

新京極を抜けると町はほんとうの夜更けになつてゐる。昼間は氣のつかない自分の下駄の音が変に耳につく。そしてあたりの静寂は、なにか自分が変なたくらみを持つて町を歩いているような感じを起こさせる。

喬は腰に朝鮮の小さい鈴を提げて、そんな夜更け歩いた。それは岡崎公園にあつた博覧会の朝鮮館で友人が買つて來たものだつた。銀の地に青や赤の七宝がおいてあり、美しい枯れた音がした。人びとのなかでは聞こえなくなり、夜更けの道で鳴り出すそれは、彼の心の象徴のように思えた。

ここでも町は、窓辺から見る風景のように、歩いている彼に展ひら

けてゆくのであつた。

生まれてからまだ一度も踏まなかつた道。そして同時に、実に親しい思いを起こさせる道。——それはもう彼が限られた回数通り過ぎたことのあるいつもの道ではなかつた。いつの頃から歩いているのか、喬たかしは自分がとことわの過ぎてゆく者であるのを今は感じた。

そんな時朝鮮の鈴は、喬の心を顫ふるわせて鳴つた。ある時は、喬の現身うつせみは道の上に失われ鈴の音だけが町を過るかと思われた。またある時それは腰のあたりに湧わき出して、彼の身体の内部へ流れ入る澄み透つた溪流のように思えた。それは身体を流れめぐつて、病気に汚れた彼の血を、洗い清めてくれるのだ。

「俺はだんだん癒なおつてゆくぞ」

コロコロ、コロコロ、彼の小さな希望は深夜の空気を清らかに

顫わせた。

六

窓からの風景はいつの夜も渝かわらなかつた。喬にはどの夜もみな
一つに思える。

しかしある夜、喬は暗やみのなかの木に、一点の蒼あおじろ白い光を見出
した。いざれなにかの虫には違いないと思えた。次の夜も、次の
夜も、喬はその光を見た。

そして彼が窓辺を去つて、寝床の上に横になるとき、彼は部屋のなかの暗にも一点の燐光^{りんこう}を感じた。

「私の病んでいる生き物。私は暗闇のなかにやがて消えてしまう。しかしお前は睡らないでひとりおきているように思える。そとの虫のように……青い燐光^{もや}を燃しながら……」

青空文庫情報

底本：「檸檬・ある心の風景 他二十編」旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

初出：「青空」青空社

1926（大正15）年8月号

※編集部による傍注は省略しました。

入力：j.utiyama

校正：陸野義弘

1998年10月13日公開

2016年7月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

ある心の風景

梶井基次郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>